

一進路部通信一

新宿折きり

NO. 44

平成 31 年 3 月 14 日
東京都立新宿高等学校
進路指導部

- 祝、卒業
- 河合模試の結果
- 春休みを有効に過ごそう

「忘れ残りの記」

国語科 田村幸司

いつから本が好きになったのだろうか。小学生の時は落ち着きがなく、じっとして本を読むのが、苦手だった。中学生の頃、司馬遼太郎の歴史小説に夢中になった。そこから井上靖、吉川栄治を読み漁った。気が付くと本が大好きになっていた。自分の悩みを他者に相談するより、本の中に答えを求めるようになった。中学の後半、ラディゲやジッド、ゲーテなど海外の恋愛小説を読み、ドキドキした。高校に入ると、自分がこれからどうやって生きて行ったら良いか、真剣に悩んだ。家が商売をやっていたので、自分の進路の現実がすぐ隣にあった。そんな時、夢中になって読んだのは「青春の門」。五木寛之には、20代前半までかぶれた。高校1年の秋、初めての三者面談の前に両親に自分は大学で、日本文学の勉強をしたいと告白した。私の家は曾祖父の代から商売をしている。私も長男なので当然、家を継ぐものと思っていた両親には、大反対された。父には怒鳴られ、母には悲鳴のような声で言葉を遮られた。高校の三者面談でも担任に、やんわりとやめた方がいいと説得された。その後、両親とはしつくりいかなくなってしまった。事あるごとに文学部に行って何になるのだと聞かれた。両親は取り立てて国語の成績のいいわけではない私が、教師になれるなんて思いもよらなかったのだろう。私もその時は先生になりたいわけではなかったので、両親からいろいろ言われても口をつぐむしかなかった。私は当時、文学の勉強を通して、人間とは何かの答えを求めたいと考えていた。そしてそれがわかつたら自分がこれからどう生きていったらいいか、見えてくるような気がしていた。高2の6月の三者面談でも新しい担任から進路を変えるべきだと言われた。夏には事業をしていた母方の祖父に呼ばれ、もし法学部へ進学したら、名のある会社に入れてやると、文学部志望を反対された。孤立無援だった。けれども不思議に腐ることなく、勉強だけはどの教科も一所懸命、努力した。勉強することが好きだった。高2の冬、志望分野が決まらない私は担任から親と一緒に来るようになると、三者面談の呼び出しを受けた。その前日、夕食を作っていた母がいきなり私の前に来て、「そんなにやりたいのなら文学部へ行っていいわ。」と言った。中学まではあまり勉強しなかったのが、高校に入ってからは勉強を頑張るようになったこと。文学部へ行きたいという志望がずっと変わらないこと。だから、そんなに行きたいのなら好きな道に行かせてあげる。というのが理由だと言われた。その後、母は父に小言を言われても、祖父に怒られても私の味方になってくれた。

あれから43年、60歳になる私は今、38年間の教員生活に一つの区切りをつけようとしている。正規教員として、最後は新宿高校に来ることが出来て、皆さんに会えて光榮でした。新宿高校の生徒は勿論、教職員、保護者、同窓会の方々、全ての人たちに「ありがとうございました。」と感謝して幕を引きたいと思います。さようなら新宿高校。

□ 祝、卒業！

大学合格状況（現役生 3/13 現在）

主な国公立大学	主な私立大学（延べ）
北海道大（3）	青山学院大（23）
東北大（2）	学習院大（3）
筑波大（4）	北里大（6）
千葉大（10）	慶應義塾大（18）
福井大医学部（1）	駒沢大（13）
金沢大（1）	芝浦工大（37）
埼玉大（1）	上智大（17）
東京大（3）	成蹊大（6）
東京医科歯科大（1）	専修大（7）
東京外国語大（4）	中央大（32）
東京学芸大（10）	東京女子大（4）
東京工業大（3）	東京農業大（27）
東京農工大（5）	東京理科大（39）
一橋大（2）	東洋大（23）
首都大学東京（13）	日本大（30）
電気通信大（1）	日本女子大（12）
横浜国立大（4）	法政大（51）
名古屋大（1）	明治大（79）
京都大（1）	明治学院大（10）
国公立大（70）	立教大（49）
	帝京大医学部（1）
	東京女子医大（1）
	東京医大（1）
	東京慈恵会医大（1）
	東京薬科大（9）
	早稲田大（38）

1月中旬のセンター試験に始まった今年の受験もいよいよ大詰めを迎えてます。現役生の13日現在の合格状況は表のとおりです。国公立大は前期の人数。後期発表は3月20日以降になります。このほか、

表には入っていませんが、浪人生も健闘しており、東大1名、一橋2名、信州大医学部医学科1名など国立大学に、数多く合格しています。

私大は昨年度から各大学で合格者数の絞り込みが行われており、ことしも早稲田大学・慶應義塾大学をはじめますます厳しい状況になっています。3教科に絞り込んで挑戦しても必ずしも結果に結びつくとはかぎりません。こうした傾向は次年度も続くと思われます。発表はほぼ終わっていますが、繰り上げ合格等で人数が変わる場合があります。私大も表は現役生のみの数ですので、これに浪人生の人数が加算されます。新宿高校としての最終結果は4月に入ってからになります。

3年生諸君、そして浪人して頑張った70回生諸君の努力に拍手を送ります。

卒業おめでとう



希望した進路に進む人。まだ結果が出ていない人。もう一度力をためてチャレンジする人。4月からの進路はさまざまだと思いますが、どれも掛け替えのない自分の人生です。自分の進む道に自信と誇りをもって前を向いて進んでください。

ご卒業おめでとうございます。皆さんの将来に幸多きことをこころからお祈りします。そして再び廻ってきた春に惜別の思いを禁じえません。

○河合記述模試の結果から

2月6日に受けた河合記述模試の結果がまもなく返却されます。難しめの試験でしたが、全体としてはよく頑張っています。本校の平均偏差値は以下の通りです。()内は昨年度の数値です。

	1年	2年
英語	60.6(58.8)	55.5(56.0)
数学	57.2(58.0)	52.0(52.9)
国語	59.2(58.2)	55.9(56.4)
英数国総合	59.0(58.3)	54.5(55.1)

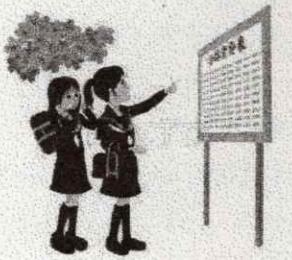
1年生は、英語と国語が堅調です。この調子で力をつけてください。数学は昨年の1年生よりも若干さがっていますが、昨年の1年生の数学がとても良い成績だったという側面もあります。

その昨年の1年生、つまり現2年生。よく頑張っていますが、皆さんの実力はこんなものではないでしょう。学年全体で雰囲気を盛り上げて、それぞれの進路実現にむけて努力しましょう。

個々人の成績に関しては、返却される成績資料には分野ごとの学力レベルなどが記されていますので、これを見て「皆がでけて、自分ができない分野」を把握し、「どの分野を克服すれば成績が伸びるのか」を確認することが必要です。自分の得意分野を自覚したうえで学習計画をたててください。模試はそのように利用してください。得意分野をあぶり出すという意味で、少し難しめの模試を受けることはとても重要です。

また、今回の河合模試では志望校の合否判定が出ていますが、これを見て志望を変えてはいけません。1年生も2年生も、この時期の判定はEが普通です。「E判が出たから志望を下げよう。」というのは言語

道断！ とんでもない話です。E判から合格する受験生は毎年大勢います。



○学び未来 PASS から

3月11日各学年で「学習・生活状況調査」を行いました。個々の結果は担任の先生との面談等で話題になると思いますが、全体的傾向として二つ考えて欲しいことがあります。

【その1】 平日の勉強時間は十分か。

【その2】 志望校を遠慮していないか。

まず、**【その1】**ですが、平日の勉強時間は「学年+2時間」を目安にして下さい。1年生なら3時間、2年生なら4時間。(3年はもっと多くなります。)現状はどうでしょうか。我が身を振り返ってください。そして、もし確保されていないのなら、何とかして学習時間を増やしてください。時間ばかりはあとに巻き戻すことはできません。

【その2】の志望校は、入れそうな大学ではなく、入りたい大学を書きましょう。不思議なもので、目標が低いとそれだけの結果に終わってしまいます。繰り返しになりますが、模試判定は無視し、自分の志望を高く掲げましょう。

来週22日には受験を終えたばかりの3年生から話を聞ける「合格速報会」があります。先輩達がどんな工夫をして勉強していたか、よく聞いて参考にしてください。

○春休みを無駄に過ごさない

学年末考査が終わり、1、2年生はほっと一息つきたいところでしょうが、同時に、3年生の受験結果をみて、身の引き締まる思いもしていることでしょう。そんな気持ちになったときがチャンスです。これまでの1年間で取りこぼしている部分、未消化の部分は是非とも春休み中に補っておきましょう。

4月には新入生が入学し、皆さんもひとつ進級して、学校の中心学年として、そして最上級学年として、大切な1年が始まります。

【今後の予定】

○卒業式 3/15 金

○合格速報会 3/22 金

○修了式 3/25 月

「人生訓などありませんけど・・・」

朝日新聞スポーツ部記者 1982年3月卒業 潮 智史 34回生

高校を卒業して37年、四捨五入すれば、60になる年齢にもなると、あのときに別の選択や決断をしていれば、いまごろどうなっていただろう、と空想にふけることもある。

今回の原稿依頼を受けてから、高校時代のガールフレンドと大学生、社会人と付き合いが続いたら……、なんてことを考えたりもした。

サッカーに没頭した高校時代を含め、これまでに自分の手でなにかを勝ち取ったといえるほどのものはない、、、たぶん。どちらかというと、自分の周囲で起きる出来事や時の流れにごく自然に身を任せてきた。だから、この場で披露するような人生訓も持ち合わせてはいない。

どうしても筑波大学でサッカーをやりたくて、親には「保健体育の教員になる」とうそをつき（もちろん、ばれています）、一浪して体育会でサッカーを続けた。

幸い、4年でレギュラーになり、選手としての誘いもあった。当時はまだJリーグができる前で、半分プロ、半分アマチュアの中途半端な時代。サッカーと就職を一緒に考えられなかった。かといって、なにがやりたいのか、はっきりしてもいなかった。

メディアの仕事に行き着いたのは大学4年の春すぎだったと思う。それも、新聞社ではなく、テレビ局。自転車レースの「ツール・ド・フランス」を特集した、NHKのドキュメンタリー番組を見たのがきっかけだった。こんな番組が作れたら楽しいだろうな、という直感に近かった。

大学4年の12月までプレーしていたので、焦りはあったが、いま思うと就活もいい加減だった。受けたテレビ局はひとつだけ。新聞社は、たまたま声をかけてもらっていたからだ。どちらもだめなら、大学院に進むか、教員採用試験を受けるか。それもだめなら、社員選手でボールでも蹴るか、と覚悟もできていなかった。

ところが、なのだ。特に記者という仕事を意識したことにもなかつたし、文章を書くことが得意でも、特別に好きでもなかつた。それでも、記者生活は30年を超えてしまつた。長続きした理由を探すと、性に合つたのだと思う。

地方支局や社会部で事件を担当した時は、事実はどうなつているのか、という純粋な気持ちで走り回つていた。スポーツが好きで、W杯や五輪、テニスやゴルフの4大大会など最高峰の舞台にいけば、いまでも興奮も感激もするが、それ以上に、あのプレーに至る選手の心理や、その技術に行く着くまでにどんな練習や思いがあったのだろう、と知りたくなる。

困つたことに、取材を終えて事実を知ることで満足してしまうこともある。そこから先の、文章にする作業が残つてゐるのにである。

こんな風に振り返ると、幸せな人生ですね、と嫌みの一つも聞こえてきそうだが、確かにそうなのかもしぬれない。好きなスポーツを仕事にできたことは幸運だった。正確にいうと、好きなことを仕事に選んだつもりはなく、スポーツと仕事を分けて考えなかつたというか、好きなことを続けているという感覚に近い。

もちろん、ジャーナリストとしての正義感も持ち合はせているつもりだし、スポーツの持つ価値や素晴らしさを広く伝えたいという使命感も持つてゐるつもりだ。ただ、これらは、記者になってから後づけされた部分もかなりある気がしている。

（朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を掲載しています。）